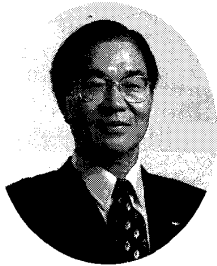


## 中部支部長からのメッセージ

## 『QC 活動ともものづくりの原点回帰』



アイシン精機(株)  
相談役 山内 康仁

お恥ずかしい話であるが、私の会社で過去に発生した品質問題を解析すると、『バラツキの概念がない』という問題が半数以上を占めていた。

あるいは、右の図で、『QC サークル大会の参加者推移』が示すように、近年、現場の QC サークル活動が停滞してきている。

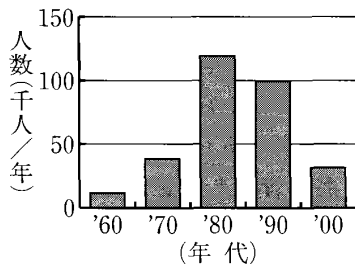


図 QC サークル大会参加者数  
(東海支部)

これらの例でもわかるように、いわゆるバブル崩壊以降、

日本は“JAPAN AS No.1”と褒め殺しに合っていた時に、われわれは慢心して、QC の基本が疎かになってしまったのではないかと危惧している。

日本企業のおかれている環境は、大きく変化している。パラダイムシフトが起こり、グローバル化は避けられないし、また従業員の価値観も大きく変化している。それ故、従来の QC があたかも時代遅れのもののように思っている人がいるのでは、と心配している。

ものづくりでは、“変えて良いこと”と“変えてはいけないこと”がある。この変えてはいけない QC 活動について私の思うところを述べてみたい。

人間は考える動物である。それゆえに一生懸命、まじめに作業をしても 100 PPM 位はミスをする、と心理学者がある実験を通じて証明している。この実験の中で、この作業をする人に、自主性を持たせ、改善できるという環境に変えるだけで、ミスが大幅に減少するそうだ。

QC サークルは、『人間が持っている本来の性を生かすという、人間尊重そのものであり、そうすることが、人間の持っている本来の能力を引き出し、

現場のモチベーションを上げる』活動であると考え

る。私は、QC サークルをしっかりと展開すれば、現場が元気になり、自主性を持って仕事を進めるようになる、と確信している。このためには、

- ・サークルレベルのアセスメントと目標設定
- ・サークル活動のやり易い環境整備と啓蒙支援
- ・管理者の役割

などを重点活動として、現場へ足を運んでいる。

また、ものづくりの“仕事の基本”をあわせて徹底して現場を見ている。私が現場を見る視点は、

- ① ルールが心を込めて作られているか
- ② 実際にやる人が理解しているか、やれるように育成しているか
- ③ ルール通りやられているかを毎日確認しているか
- ④ やりにくい作業は改善しているか

である。ものづくりの基本の教育や監督者の育成は大変大事なことと考えている。

次に SQC 活動も基本教育は全員にキッチリ教え込まなければならない。全技術系スタッフには、SQC や信頼性などの基本知識は全員の必須教育とし、その上でプロを育てることが、重要なことと考える。

基本教育をしておけば、人は“上司の一言”や“組織のビジョンの共有化”で働きがいを感じる。QC 活動は CS のみならず ES にもつながる活動であると私は考えますが、どうだろうか。

ものづくりの中で、時代の変化がどうあっても、日本が強みとして、脈々と受け継ぐべきことがいくつかあると考える。SQC とか QC サークルといった QC 活動は日本のものづくりを支えた原点であり、いつの時代にもしっかりとやらなければならないと考えている。